

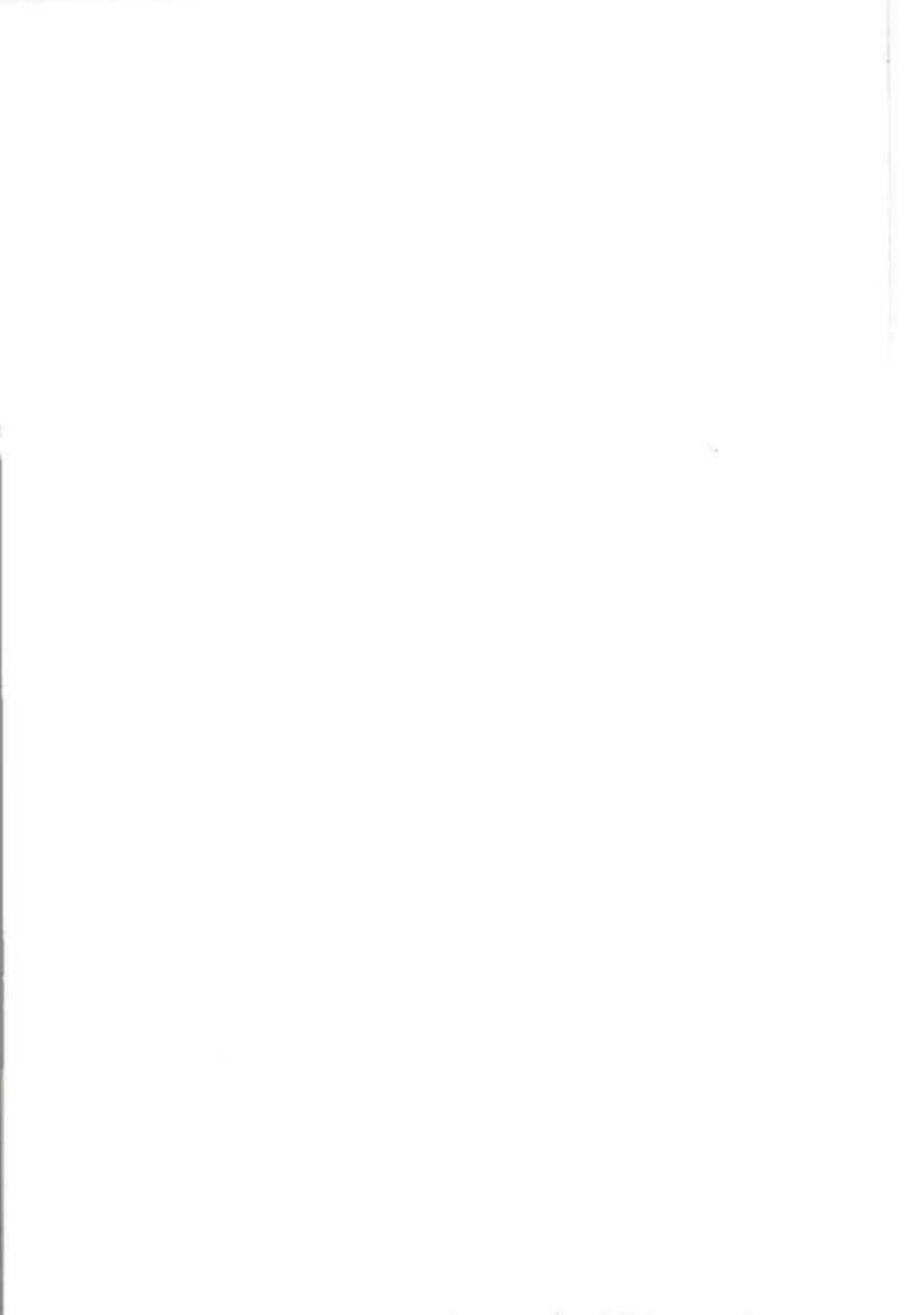
上峰町文化財調査報告書第27集

坊所二本松遺跡II

平成15年度佐賀県営土地改良総合整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月

上峰町教育委員会



上峰町文化財調査報告書第27集

坊所二本松遺跡II

平成15年度佐賀県営土地改良総合整備事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2005年3月

上峰町教育委員会

序

從来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、国道34号線以南の町南部の沖積平野の耕地を対象に昭和40年代後半から県営農業基盤整備事業が実施され、平成11年度より、用排水路、農道整備などを目的とした県営土地改良総合整備事業が開始されました。

この報告書は、平成15年度に実施した上峰町下坊所地区の農道整備に伴い発掘調査を実施した坊所二本松遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。坊所二本松遺跡は、平成9年度に民間の共同住宅建設に伴い発掘調査を実施しましたが、弥生時代の甕棺墓35基をはじめ祭祀土壙、中世の溝跡などが検出され、この地域の弥生時代の墓域のあり方を考える上で貴重な資料となっております。今回の発掘調査は、農道整備という限られた範囲の調査ではありましたが、弥生時代中期の甕棺墓11基をはじめ同時代の土壙墓と考えられる遺構、その他土壙などが検出されました。

今回の調査によって、坊所二本松遺跡では、今回の調査の対象となったような丘陵の縁辺部まで墓地として利用されていたことが判明し、当地における墓域のあり方を考える上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました佐賀県教育委員会文化課、佐賀県県土づくり本部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成17年3月

上峰町教育委員会

教育長 八 谷 日出夫

例　　言

1. 本書は、平成15年度の佐賀県営土地改良総合整備事業の2号農道整備に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県農政部の委託事業として発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松に所在する坊所二本松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成16年度佐賀県営農林業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県土づくり本部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。
3. 発掘調査は、平成15年度の佐賀県営土地改良総合整備事業の2号農道整備に係る工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、便宜的な調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。
4. 調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成15年度	坊所二本松遺跡	2区	200m ²	平成16年1月15日 平成16年2月20日

5. 現場での遺構実測作業は、調査員の指示により、実測作業員が行った。
6. 遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。
7. 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
8. 本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
9. 本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
10. 本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 坊所二本松遺跡の略号は、それぞれ「BNM」であり、調査区略号は、「BNM-2」とした。
2. 遺構番号は、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの2桁の番号を組み合わせて表記した。
SJ……甕棺墓　SK……土壙　SE……井戸跡
例) SJ-201 2区の1号甕棺墓　SK-215 2区の15号土壙
3. 本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。
4. 表中の数値に付した記号について、()は推定値を、(×)は部分値・残存部値をそれぞれ表している。
5. 土器実測図の縮尺は、原則として1/4である。
6. 出土遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。
7. 平成17年3月1日、三養基郡内の中原・北茂安・三根の3町が合併し、三養基郡「みやき町」となったが、本書では、旧町名のまま標記している。

調査組織(平成15年度調査時)

調査事務局	統括	八谷日出夫	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	八谷勝憲	"	教育課長
	経費執行	原田大介	"	文化係長
		樋口佳子	"	文化係
調査組織	調査員	原田大介	上峰町教育委員会	文化係長
調査指導		佐賀県教育委員会		

発掘作業参加者

山田富士夫、石橋トシエ、三好慶子、矢動丸五十三、吉岡正道、馬原喜美子、江崎晃子、鶴田ふさ子、
富松博明、平野末久、田中静雄、山本タツミ、田中梅子、緒方ツタエ、高妻志保、重松文彦、秋山加代子

(発掘作業員)

島 美保子、田尻祐子(実測作業員)

整理作業参加者

島 美保子、田尻祐子(製図作業員)

目 次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 坊所二本松遺跡の位置	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査に至る経緯	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査の経過	6
III. 調 査	7
1. 遺跡の概要	7
2. 調査区の概要	7
3. 遺 槽	10
(1) 妻棺墓	10
(2) 土 墓	18
(3) 井戸跡	18
4. 遺 物	20
(1) 妻 棺	20
(2) 井戸跡出土遺物	23
IV. まとめ	24

挿 図 目 次

Fig. 1 坊所二本松遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)	2
Fig. 2 坊所二本松遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)	8
Fig. 3 坊所二本松遺跡 2 区 遺構配置図 (1/150)	9
Fig. 4 妻棺墓実測図 (1) (1/20)	12
Fig. 5 妻棺墓実測図 (2) (1/20)	13
Fig. 6 妻棺墓実測図 (3) (1/20)	14
Fig. 7 妻棺墓実測図 (4) (1/20)	15
Fig. 8 妻棺墓実測図 (5) (1/20)	16
Fig. 9 妻棺墓実測図 (6) (1/20)	17

Fig.10 土壌・井戸跡実測図 (1/60)	19
Fig.11 銀棺口縁部実測図 (1/4)	21
Fig.12 出土遺物実測図 (1) (1/4)	22
Fig.13 出土遺物実測図 (2) (1/4)	23

表 目 次

Tab. 1 坊所二本松遺跡 2 区 出土銀棺墓一覧表	11
Tab. 2 坊所二本松遺跡 2 区 出土土壤一覧表	18
Tab. 3 坊所二本松遺跡 2 区 出土銀棺一覧表	20

報告書抄録

図 版 目 次

PL. 1 坊所二本松遺跡 2 区 調査区遠景	
PL. 2 調査区近景 0mp~20mp付近・35mp付近より東部分	
PL. 3 銀棺墓 (1) SJ-201~SJ-210	
PL. 4 墓 (2) SJ-211・土壌 SK-218~SK-220・井戸跡 SE-212・遺物 (1) SE-212出土	
PL. 5 遺物 (2) SE-212出土	
PL. 6 遺物 (3) SE-212出土	

I. 遺跡の位置と環境

1. 坊所二本松遺跡の位置 (Fig. 1, 2)

坊所二本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松の洪積世低位段丘上（標高6m～8m付近）に位置している。

坊所二本松遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のはば中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東春振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に春振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開拓され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心にして遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

坊所二本松遺跡が立地する丘陵は、上峰町中南部の上坊所、下坊所両集落が占有する坊所丘陵の南部下坊所丘陵南端からさらに南東に延びる一枝丘で、標高約5mの沖積地に半島状に突き出した丘陵である。丘陵東側の沖積地は切通川の氾濫原であるのに対し、丘陵南側の沖積地は古筑後川の最大蛇行線と考えられ、この丘陵と沖積地と境界には比高2m程の段丘崖が発達している。

2. 歴史的環境 (Fig. 2)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の墓落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡³、約400基の要棺墓が検出された中原町姫方遺跡³、埋納された12本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡³、要棺墓から船軛鏡を出土した神埼郡東春振村三津永田遺跡³、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東春振の2町1村にまたがる吉野ヶ里遺跡³など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘で層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八幡遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調



上野町	12 塙六本谷遺跡	24 坊所被跡	中原町	47 西高水道跡	神崎町
1 真の院古墳群	13 堀土見跡	25 橋寺遺跡	30 山田古墳出土土地	48 宮奈谷遺跡	56 志染屋第六本松遺跡
2 痢西山古墳	14 八幡遺跡	26 杉寺遺跡	37 山田古墳群	49 宮奈谷前方後円墳	57 伊勢守前方後円墳
3 二本柳古墳群	15 二星山遺跡	27 劍第二一本松遺跡	38 大冢古墳	50 大坂古墳	58 馬鹿遺跡
4 瓢西山南麓古墳群	16 五本谷遺跡	28 劍第三一本松遺跡	39 八幡社遺跡	51 宝尾銅劍出土遺跡	59 西石動古墳群
5 坂三本松遺跡	17 牯石道跡	29 店の原脇寺跡	40 貴風道跡	60 本分貝塚	60 橋場ト谷遺跡
6 猪形原古墳群	18 牀石南遺跡	30 上手多貝塚	41 萩方道跡	61 三想町	61 三津木山遺跡
7 父祖古墳群	19 切通道跡	31 米子城跡	42 萩方前方後円墳	62 本分貝塚	62 西石動古墳
8 堀三本松遺跡	20 一本谷道跡	32 前原田城跡	43 萩方原遺跡	63 三田川町	63 松原遺跡
9 背荷古墳群	21 坊所一本谷遺跡	33 加茂岸岸集落跡	44 ドンドン路遺跡	64 古野ヶ里丘陵遺跡群	64 半上美寺跡
10 新立古墳群	22 上のびゅう堀古墳	34 江口城跡	45 町南遺跡	65 下中村遺跡	65 熊田遺跡
11 猪形原遺跡	23 目達原古墳群	35 一ノ便場原集落跡	46 天神道跡	66 下高貝塚	

Fig. 1 坊所二本松遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)

査における主な出土例である⁶。周辺地域では、神崎郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている⁷。また、平成5年度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近のアカホヤ含有層のやや下部にて検出されている⁸。

縄文時代になると、中原町香田遺跡⁹や東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹⁰などが出現する。町内においても、これまでにも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先発者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区¹¹、平成2年度から5年度にわたり実施した八藤丘陵の調査¹²において、遺構や遺物がまとめて検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥叔国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三菱基盤西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、斐拾墓から細形鋼剣や貝鏡を出土した切通遺跡¹³、神崎郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い斐拾墓、土壤墓など約300基が調査され、船載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡¹⁴、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡¹⁵、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の斐拾墓が検出された船石遺跡¹⁶などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡¹⁷、船石南遺跡¹⁸、八藤遺跡¹⁹から住居址や斐拾墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡²⁰、上峰町五本谷遺跡²¹などにおいて方形周溝墓が當まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市劍塚古墳²²、中原町姫方古墳²³、上峰町西南部から神崎郡三田川町にまたがる目達原古墳群²⁴、神崎郡神塙町伊勢塚古墳²⁵、佐賀市鈴子塚古墳²⁶、佐賀郡大和町船塚古墳²⁷など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保-鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一带に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部・米多郷に属する当時の上峰町一帯は、「古事記」、「国造本紀」などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神崎郡三田川町東部の目達原一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、福荷塚などの前方後円墳6基ほか古稻荷塚など円墳數基からなる目達原古墳群²⁸が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、

唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳³⁰⁾が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、星形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中村遺跡³¹⁾、同郡東脊振村下石動遺跡³²⁾などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なく、まだ実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中村遺跡、東脊振村辛上廐寺跡³³⁾、靈仙寺跡³⁴⁾などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡³⁵⁾や塔の冢廢守跡³⁶⁾などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、阪築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設=「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され³⁶⁾、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の冢廢守跡は、百济系卑軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の都司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡³⁷⁾の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた³⁸⁾。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡とともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している³⁹⁾。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

- 1) 藤瀬祐博・石橋新次『袖比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980
- 2) 木下 巧・天本洋一『郷方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭『検見谷遺跡』北陵安町文化財調査報告書第2集 北陵安町教育委員会 1986

- 4) 金間丈夫・坪井清足・金間 忍「佐賀県三津水田遺跡」「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 5) 七田忠昭他「吉野ヶ里」 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
- 6) 原田大介「八幡遺跡III」 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 7) 七田忠志「原船」「上峰村史」 上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄「II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」「佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林」 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堺 安信・久保伸洋「香田遺跡」「香田遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」「史前学雑誌」 6-2-4 1934
- 11) 原田大介「船石遺跡V」 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 原田大介「八幡遺跡II・堤土塁跡II」 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出(6)
- 13) 金間丈夫・金間 忍・原口正三「佐賀県初通遺跡」「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 15) 七田忠昭「一本谷遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 16) 七田忠昭「船石遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II 国鉢編」 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II 文本編」 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 18) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 19) 原田大介「八幡遺跡I」 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
- 20) 木下 巧 他「姫方原遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 21) 木下 巧・七田忠昭「五本谷遺跡」「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 22) 石橋新次「劍塚前方後円墳」 烏栖市文化財調査報告書第22集 烏栖市教育委員会 1984
- 23) 前出(2)
- 24) 松尾耕作「目達原古墳群調査報告」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第9輯 佐賀県教育委員会 1950
- 25) 木下之治「古代国家の形成」「佐賀県史」佐賀県 1968
- 26) 木下之治編「銚子坂」 佐賀市教育委員会 1976
- 27) 松尾耕作「佐賀県考古大観」 柏德博物館 1959
- 28) 前出(24)
- 29) 前出(16)
- 30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己「下中杖遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 31) 高瀬哲郎 他「下石動遺跡」「下石動遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 32) 松尾耕作「東脊振村辛上魔寺跡の調査」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」第5輯 佐賀県 1936
- 33) 田平徳栄 他「雲仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 34) 高島忠平・祇 一義「堤土塁跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 35) 松尾耕作「塔の塚魔寺址」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」第7輯 佐賀県 1940
- 36) 前出(12)
原田大介「八幡遺跡III」 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 38) 米倉二郎「中世」「上峰村史」 上峰村 1979
- 39) 原田大介「坊所城跡」 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査の契機となった平成15年度県営土地改良総合整備事業2号農道整備に係る事業計画に伴い埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行ったのは、平成14年10月15日に開催された「平成15年度農林業基盤整備事業等に係る文化財の保護に関する第1回協議会」であった。その席上、平成15年度の県営土地改良総合整備事業として本町下坊所地区における2号農道整備計画が提示された。

2号農道整備の事業内容は、本遺跡が立地する丘陵とその南に広がる沖積地の境界に沿った既設農道延長265mの拡幅及び舗装工事であり、計画では、工事総延長265mの範囲のうち東側部分延長約100mについて、最大幅で5mほど丘陵南側法肩部分に拡幅工事の影響が及ぶというものであった。この一帯の丘陵上の畠や竹やぶには甕棺として使用されたと考えられる大型の弥生式土器片が散見され、ある程度甕棺墓などの存在が予想されたため、教育委員会では、道路の沖積地側への拡幅による埋蔵文化財泡蔵地外への農道法線の変更を提案したが、南の水田などの制約で計画変更は難しいとの結論であった。

その後、平成15年3月17～19日、6月9日、7月22・23日の3回にかけて、工事予定地内の埋蔵文化財確認調査を実施したところ、工事の影響が及ぶ丘陵法肩部分で延長約60mにわたり、甕棺墓、土壙などが検出され、弥生式土器片などが出土した。これを受け、今回の調査の対象となった延長約60m、幅最大で約5mの約200m²について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

2. 調査の経過

平成15年度の土地改良総合整備事業2号農道整備に伴う発掘調査は、道路拡幅工事により削平が予定される丘陵南側の法肩および斜面部分について、延長約60m、幅最大で約5mの約200m²の部分を便宜的に坊所二本松遺跡2区として実施した。現地での作業は、平成16年1月15日から2月20日まで行った。以下簡略に調査経過を記す。

平成16年1月15日　調査対象地区西側から重機による遺構検出面までの表土掘削作業を開始し、坊所二本松遺跡2区の調査に着手した。

20日　発掘作業員を招集、発掘機材類の搬入、休憩用のテント設営後、調査区西側から遺構検出作業に着手。以後、検出された遺構は、逐次掘り下げ作業を行い、発掘作業を調査区の東側へと進めていった。また、調査区西端から東端へ一直線のラインを設定し、ライン上に5mごとのポイントを設け、これを基準に遺構の実測を行った。

2月2日　甕棺墓をはじめとする遺構の写真撮影、実測作業に着手。以後、発掘作業を縮小し、甕棺墓の実測作業と並行して発掘作業を行った。

20日　最後の甕棺墓の実測を終え、発掘作業を終了。発掘機材類、テントの撤収を行い、現場での作業をすべて終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、遺構実測図、写真等の記録類の簡単な整理作業を実施した。

III. 調査

1. 遺跡の概要 (Fig. 2)

坊所二本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松の標高6m～8m付近の洪積世低位段丘上に位置している。町の中南部に位置し、現在上坊所、下坊所の集落が占有する坊所丘陵は、丘陵の中央部に中世城館跡である坊所城跡が位置しているが、この付近を谷頭として上峰小学校グランド南側で切通川の氾濫原に流れ込む小谷によって、上坊所集落や小学校が立地し、櫻寺遺跡や坊所城跡が広がる丘陵（「上坊所丘陵」と呼称する。）と下坊所集落が立地し、杉寺遺跡や坊所三本松遺跡が広がる丘陵（「下坊所丘陵」と呼称する。）に分かたれてい る。坊所二本松遺跡は、この下坊所丘陵の南端からさらに南東へ半島状に延びた丘陵部分に位置している。

遺跡が位置する下坊所地区をはじめ坊所地区一帯は、中世以来、集落として発達し早くから宅地化が進んでき たため、これまで本格的な埋蔵文化財発掘調査の例がなかったが、今回の発掘調査を含めて、近年の再開発に伴い、部分的にではあるが発掘調査が行われるようになった。分譲宅地造成に伴う坊所城跡¹⁾、上峰町ふるさと学館（旧村役場跡地）や共同住宅建設に伴う櫻寺遺跡²⁾の調査など、開発行為に先立つ埋蔵文化財発掘調査で、弥生時代から中世に及ぶ遺構がかなりの密度で現在も遺存していることが明らかになりつつある。

一方、坊所二本松遺跡が位置する丘陵では、平成9年に共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した坊所二本松遺跡1区³⁾の調査において弥生時代中期の甕棺墓約30基が検出され、その他の部分でも畑や竹藪の中に、耕作中に掘り起こされた甕棺に使用されたと思われる大型甕の破片が散布している。また、本丘陵の先端部においても坊所地区機械利用組合の農業機械格納庫建設当時、多数の甕棺墓が発見されたといわれている。

註

- 1) 原田 大介『坊所城跡』上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992
- 2) それぞれ平成4年、同8年に上峰町教育委員会が調査。現在整理作業中。
- 3) 原田 大介『坊所二本松遺跡』上峰町文化財調査報告書第15集 上峰町教育委員会 1998

2. 調査区の概要 (Fig. 2, 3・PL. 1, 2)

今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった坊所二本松遺跡2区は、遺跡が立地する半島状の丘陵の先端付近の丘陵法肩部分の標高5m～6m付近に位置している。南東に延びる丘陵は、今回の調査地区から東へ30m程の所で沖積地に渡り、丘陵の南側は標高約4mの沖積地が広がり、現在は圃場整備後の水田として利用されている。

今回の調査区は、丘陵の法肩に位置し、延長約60m、幅が最大で約5mと変則的な調査となつたため、通常の面的なグリッドは設定せず、整備される農道の法線に沿って、調査区の西端から東端へ一直線のラインを軸にして、調査区西端に0mポイント（以下本文中、10mポイントは「10mp」と略記する。）を設定し、ここから5mおきにポイントを設定し、調査の基準とした。

調査区が丘陵の法面上に位置することから、調査区域内の土層は一定せず、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層が失われた部分、反対に包含層が残っている部分などが見られ、遺構検出面であるいわゆる地山が面的に検出できた部分は調査区域の2/3程度の範囲であった。

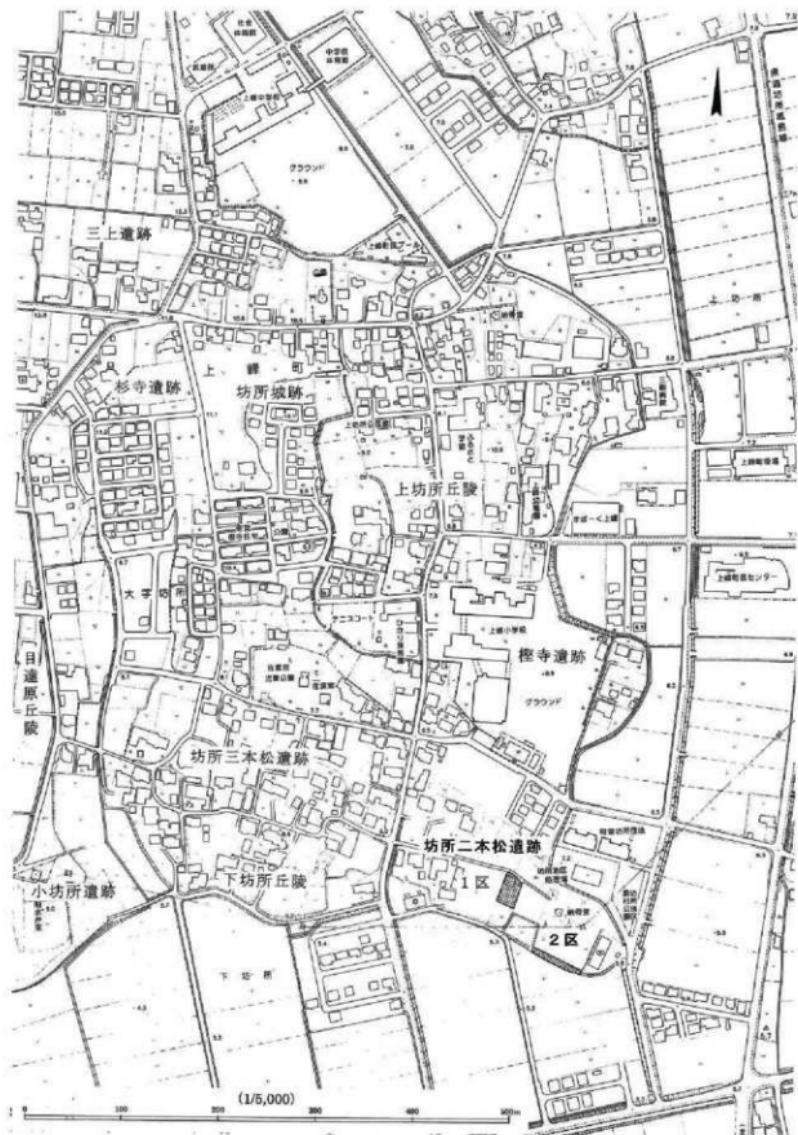


Fig. 2 坊所二本松遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)

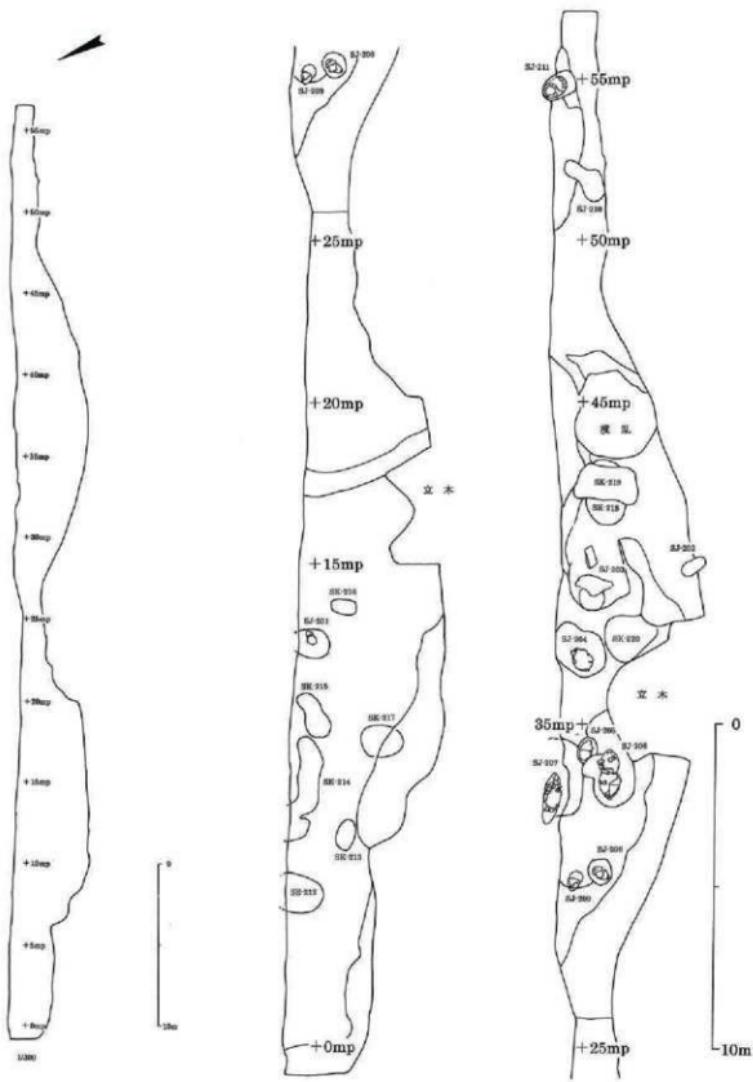


Fig. 3 坊所二本松遺跡2区 遺構配置図 (1/150)

3. 遺構 (Fig. 3~10・PL. 2~4)

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期の甕棺墓11基をはじめ同時代の土壙墓と考えられる遺構を含む土壙8基、その他ピットなどであった。また、中世の井戸跡と考えられる竪穴状遺構も1基検出された。

また、これら検出された遺構からは、甕棺として使用された弥生式土器や中世井戸跡から土鍋などの中世土器が出土した。また、いくつかの土壙や甕棺の墓壙内にも弥生式土器片が散見されたが、いずれも小片で数も極めて少ない。

(1) 甕棺墓 (Fig. 3~9・PL. 3、4・Tab. 1)

前述のように今回の調査で甕棺墓は11基が検出された。そのうち8基は、ほぼ原位置を保っているものの、SJ-202、SJ-210の2基は丘陵の法面に位置し、法面の崩落に伴って二次的な状況で検出されている。

これらを被葬者用別に見ると、成人用がSJ-203、SJ-204、SJ-206、SJ-207、SJ-211の5基、小児用がSJ-201、SJ-202、SJ-205、SJ-208、SJ-209、SJ-210の6基に分類できる。

甕棺墓の形式別に見ると、原位置を損なっていると思われるSJ-202、SJ-210を除き、上下の甕と甕を組み合わせた複式棺が8基、単棺式は石蓋で閉塞されたSJ-203の1基であった。また複式棺も、挿口式はSJ-201、SJ-204、SJ-205、SJ-206、SJ-207、SJ-208の5基、覆口式がSJ-209の1基、挿入式あるいは上蓋が下窓内に落ち込んだものと思われるものがSJ-211の1基であった。

一方、甕棺として用いられている甕棺の器種の組み合わせについて見ると、成人用甕棺墓では、以下の①~⑤のバリエーションが見られる。

- ①「T」字形口縁をもち、器体が砲弾形を呈す大型甕を上下組み合わせたもの。SJ-207。
- ②「T」字形口縁をもち、器体が載頭卵形を呈す大型甕を上組み合わせたもの。SJ-206。
- ③上甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、胸部が張りをもち器体がイチジク形を呈す小型甕と下甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、器体が載頭卵形を呈す大型甕を組み合わせたもの。SJ-204。
- ④上甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、胸部が張りをもち器体がイチジク形を呈す中型甕と下甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、器体が載頭卵形を呈す大型甕を組み合わせたもの。SJ-211。
- ⑤単棺で、下窓に口縁が逆「L」字形を呈す載頭卵形の大型甕を用いたもの。SJ-203。

また、小児用甕棺墓について、用いられている甕棺の器種の組み合わせを見ると、以下の①~⑤のバリエーションが見られる。

- ①逆「L」字形口縁をもち、器体が砲弾形を呈す小型甕を上下組み合わせたもの。SJ-202、SJ-205。
- ②上甕に逆「L」字形口縁をもち、器体が砲弾形を呈す小型甕と下甕に「T」字形口縁で器体が載頭卵形を呈す大型甕を組み合わせたもの。SJ-210。
- ③口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、胸部が張りをもち器体がイチジク形を呈す小型甕を上下組み合わせたもの。SJ-201。
- ④上甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、胸部が張りをもち器体がイチジク形を呈す小型甕と下甕に口縁部が逆「L」字形口縁で、器体が載頭卵形を呈す大型甕を組み合わせたもの。SJ-209。
- ⑤上甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、胸部が張りをもち器体がイチジク形を呈す小型甕と下甕に口縁部が「く」の字形に屈曲し開き、器体が載頭卵形を呈す大型甕を組み合わせたもの。SJ-208。

以上のように、多様な組み合わせが見られるが、これは丘陵の縁辺部、すなわち墓域の縁辺部というこれらの

甕棺墓が営まれた「区域」に起因するものと考えられる。

また、これらを時期別に分類すると、

時 期	成 人 用	小 児 用
中期前半	SJ-206・SJ-207	SJ-202・SJ-205・SJ-210
中期中葉	SJ-204	SJ-201・SJ-208・SJ-209
中期後半	SJ-203・SJ-211	—

以上のように分類できよう。

以下、検出された甕棺墓について図示し、検出状況や推定できる範囲で法量などを記して報告したい。

Tab. 1 坊所二本松遺跡 2 区 出土甕棺墓一覧表

甕棺墓 番 号	甕棺形式	組合せ 器 種 (上・下)	成 人 ・ 小 児 用 の 別	墓 墓 規 模 (m)			方 位	傾 斜	備 考
				長さ	幅	深さ			
SJ-201	接口式	甕・甕	小児用	■1.1 0.60	0.89 0.49	0.23 0.33	N-113°-W	52°	
SJ-202	?	—・甕	小児用	—	—	—	?	?	
SJ-203	石蓋單棺	甕	成人用	2.56 0.88	(2.0) (0.8)	0.92 1.15	N-93°-E	42°	粘土目貼り
SJ-204	接口式	甕・甕	成人用	1.86 (1.2)	1.38 (1.2)	0.16 0.28	N-70°-E	35°	
SJ-205	接口式	甕・甕	小児用	■1.0	(0.7)	0.20	N-77°-W	0°	
SJ-206	接口式	甕・甕	成人用	■1.8	0.88	0.27	N-89°-W	0°	
SJ-207	接口式	甕・甕	成人用	■2.8	■0.8	—	N-114°-E	0°	埋め戻し保存
SJ-208	接口式	甕・甕	小児用	0.81	0.68	0.42	N-155°-W	45°	
SJ-209	覆口式	甕・甕	小児用	—	—	—	N-65°-W	45°	
SJ-210	?	甕・甕	小児用	—	—	—	N-24°-E	0°	
SJ-211	挿入式?	甕・甕	成人用	■1.1	0.70	0.95	N-33°-W	44°	

SJ-201 (Fig. 4 · PL. 3)

SJ-201は、13mp付近の調査区北側の境界で検出された小児用甕棺墓である。今回の調査において0mp~20mpまでの範囲で検出された唯一の甕棺墓である。後世の削平を受け、上甕の一部を失っている。墓壙は、一次墓壙が長軸1.1m以上、短軸0.89m、深さ0.23mの不整橿円形を呈し、一次墓壙の東辺にさらに0.60m×0.49m、深さ0.33mの不整円形の二次墓壙が掘り込まれている。甕棺は、上下ともに「く」の字形口縁をもちイチジク形を呈す小型甕を使用した接口式の複式棺である。上甕と下甕の法量は、上甕は口径24cm、遺存部で器高28cm、下甕は口径25cm、器高30cmである。主軸はN-113°-W、傾斜角度は52°を測る。

SJ-202 (Fig. 4 · PL. 3)

SJ-202は、40mp付近の調査区の南側境界付近水田面に近い法下部分で破片の状態で検出された小児用甕棺墓である。本来の位置を失っているものと思われ、墓壙などは不明。甕棺は、逆「L」字形口縁で口縁下部に断面三角形の突帯を1条もつ砲弾形の小型甕の一部が遺存している。甕の法量は、口径24cm、遺存部で器高17cmである。主軸、傾斜角度も不明。

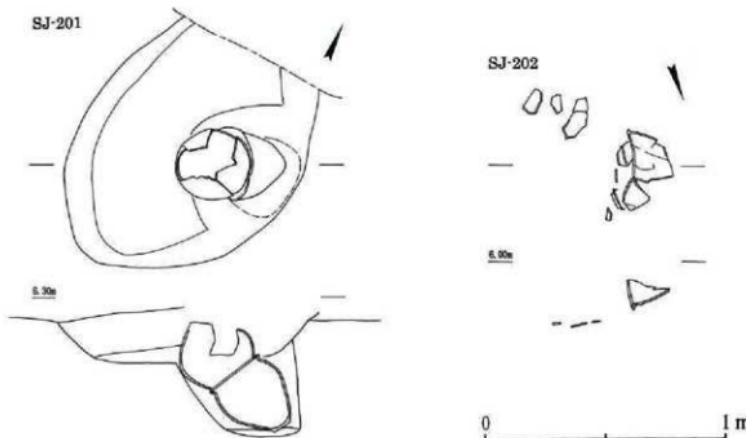


Fig. 4 甕棺墓実測図 (1) SJ-201 · SJ-202 (1/20)

SJ-203 (Fig. 5 · PL. 3)

SJ-203は、39mp付近の調査区北側境界に接して検出された成人用甕棺墓である。今回の調査において検出された唯一の石蓋单棺式の甕棺墓である。墓壙の東部が木の根の跡などと考えられる搅乱によって一部破壊されているが、棺体はほぼ完全な形で検出された。墓壙は、一次墓壙が長さ2.56m、幅約2.0m、深さ0.92mの不整な隅丸方形を呈し、一次墓壙の西端にさらに長さ0.88m、幅約0.8m、深さ0.23mの円形の二次墓壙が掘り込まれている。甕棺は、口縁が逆「L」字形を呈す截頭卵形の大型甕で、口縁部直下に断面三角形の突帯1条、胴部下位に断面「コ」の字形の突帯2条がめぐる。下甕の法量は、口径60cm、器高91cmである。棺の閉塞に使用されて

いる蓋石は、120cm×86cm、厚さ11cmの不整な菱形を呈す扁平な切石が使用され、蓋石と斐棺口縁の隙間は粘土目張りが施されている。また、棺体から東に約50cm離れた位置に一辺20cm～30cm、長さ55cm程度の四角柱状の石が置かれている。主軸はN-93°-E、傾斜角度は42°を測る。

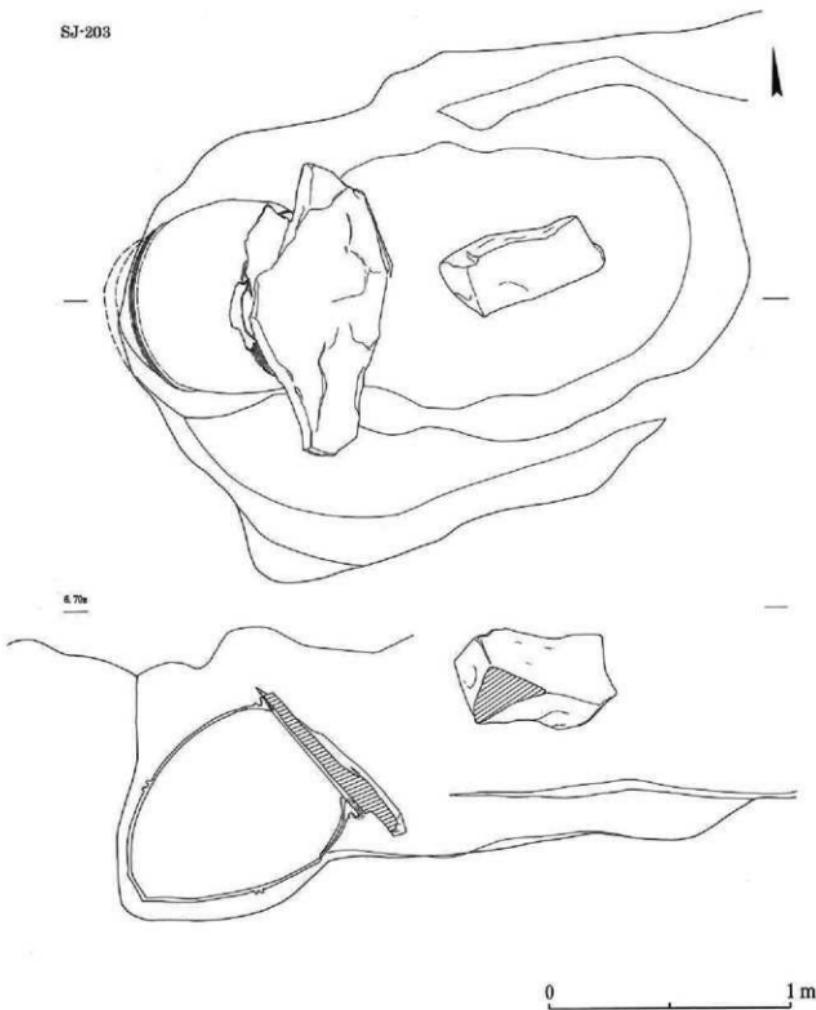


Fig. 5 斐棺墓実測図 (2) SJ-203 (1/20)

SJ-204 (Fig. 6 · PL. 3)

SJ-204は、37mp付近の調査区の北側境界に接して検出された成人用甕棺墓である。後世の削平を受け、上甕の大部分と下甕の上半部を失っている。墓壙は、一次墓壙が長軸1.86m、短軸1.38m、深さ0.16mの不整椭円形を呈し、一次墓壙の西側にさらに深さ0.12m、直径約1.2mの円形の二次墓壙が掘り込まれている。甕棺は、接口式と考えられる複式棺で、上甕は「く」の字形口縁でイチジク形を呈す小型甕。下甕は口縁が「く」の字形を呈す截頭卵形の大型甕で胴部中位に断面「コ」の字形の突帯が1条めぐる。上甕と下甕の法量は、上甕は口径33cm、器高は遺存部で17cm、下甕は口径40cm、器高68cmである。主軸はN-70°-E、傾斜角度は35°を測る。

SJ-205 (Fig. 6 · PL. 3)

SJ-205は、35mp付近の調査区中央で検出された小児用甕棺墓である。後世の削平を受け、上下の甕の上半部を失っている。墓壙は、長軸1.0m以上、短軸推定0.7m、深さ0.20mの不整椭円形を呈す。甕棺は、上下とともに逆「L」

字形口縁の砲弾形の小型甕をもちいた接口式の複式棺である。上甕と下甕の法量は、上甕は口径32cm、器高41cm、下甕は口径28cm、器高37cmである。主軸はN-77°-W、傾斜角度は0°を測る。

SJ-206 (Fig. 7 · PL. 3)

SJ-206は、34mp付近の調査区中央で検出された成人用甕棺墓である。後世の削平を受け、上甕の上半部と下甕の一部を失っている。墓壙は、長軸1.8m以上、短軸0.88m、深さ0.27mの不整椭円形を呈す。甕棺は、上下とともに「T」字形口縁の截頭卵形の大型甕で、上甕は胴部中位に、下甕は口縁下部と胴部中位に断面三角形の突

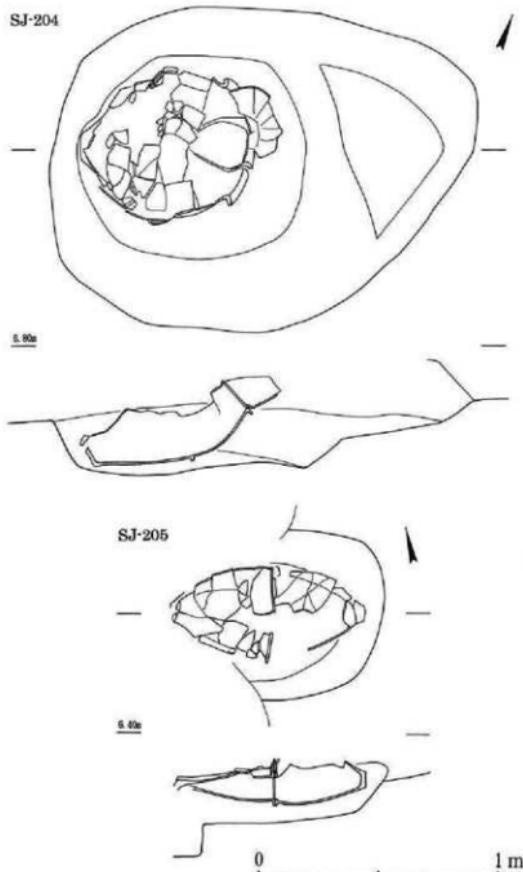


Fig. 6 甕棺墓実測図 (3) SJ-204 · SJ-205 (1/20)

帶が1条ずつめぐる。接口式の複式棺である。上蓋と下蓋の法量は、上蓋は口径49cm、器高81cm、下蓋は口径40cm、器高は遺存部で72cmである。主軸はN-89°-W、傾斜はほぼ水平である。

SJ-207 (Fig. 7 · PL. 3)

SJ-207は、33mp付近の調査区の北側境界で墓壙が検出された成人用喪棺墓である。棺体の1/3程度を確認したが、他の部位は調査区域外へ続いている。工事の影響が及ばないことが確認できたので埋め戻し保存した。

墓壙は、確認長で長軸2.8m、短軸0.8mの隅丸方形を呈している。喪棺は、接口式の複式棺で、上下ともに「T」字形口縁をもつ砲弾形の大型喪で、胴部に断面三角形の突帯が2条めぐる。上蓋と下蓋の法量は、上蓋は口径52cm以上、器高は105cm以上、下蓋は口径51cm以上、器高65cm以上である。主軸は推定でN-114°-E、傾斜はほぼ水平である。

SJ-206

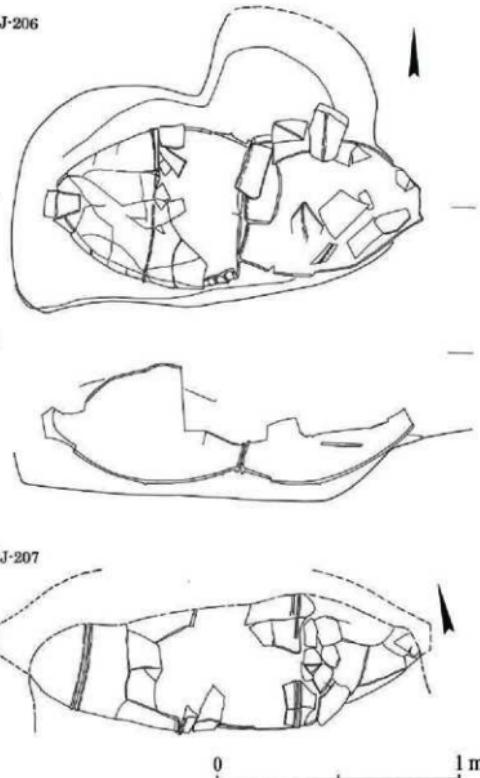


Fig. 7 喪棺墓実測図(4) SJ-206 · SJ-207 (1/20)

SJ-208 (Fig. 8 · PL. 3)

SJ-208は、30mp付近の調査区の南側で検出された小児用喪棺墓である。墓壙は、長軸0.81m、短軸0.68m、深さ0.42mの不整形円形を呈している。喪棺は、接口式の複式棺で、上蓋は「く」の字形口縁でイナジク形を呈す小型喪。下蓋は口縁が「く」の字形を呈す截頭卵形の大型喪で胴部中位に断面「コ」の字形に近い突帯が2条めぐる。上蓋と下蓋の法量は、上蓋は口径28cm、器高は31cm、下蓋は口径26cm、器高41cmである。主軸はN-155°-W、傾斜角度は45°を測る。

SJ-209 (Fig. 8 · PL. 3)

SJ-209は、30mp付近の調査区の北側境界に接して検出された小児用喪棺墓である。墓壙は、棺体東側一帯に2.2m×1.2m程の不整形の落ち込みが見られ、プラン、規模とともに不明である。またこの落ち込みによるSJ

SJ-208
SJ-209

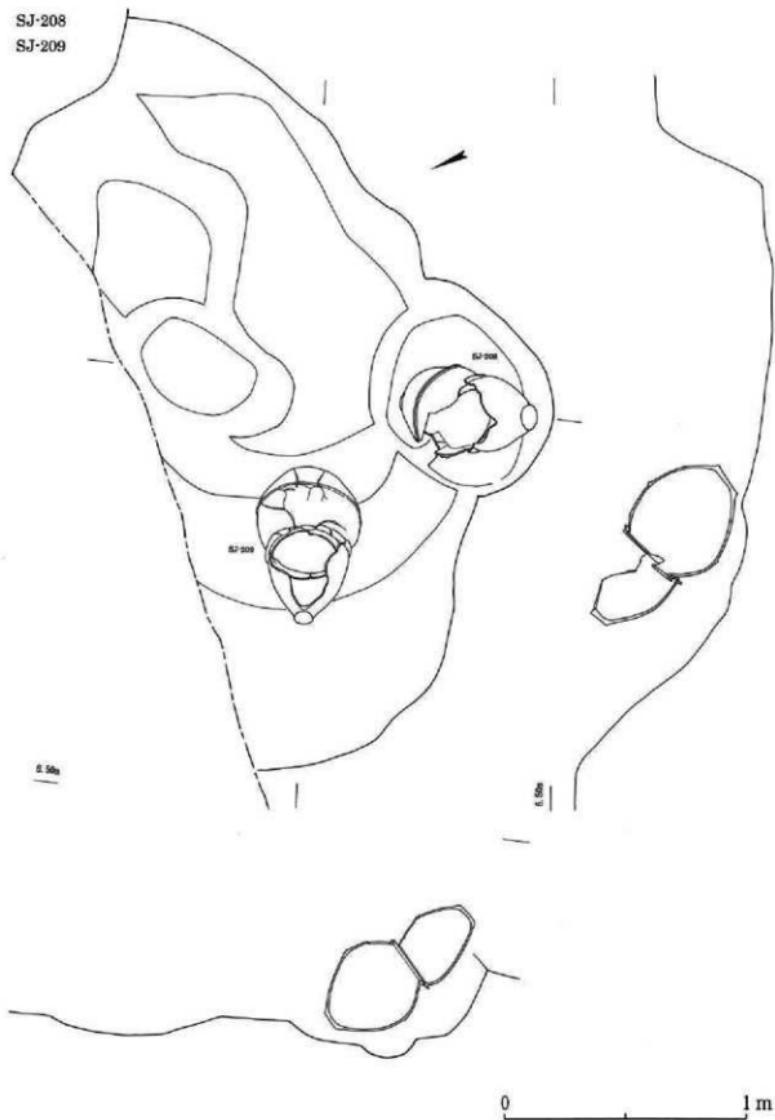


Fig. 8 墓棺墓実測図 (5) SJ-208・SJ-209 (1/20)

-209の棺体への影響は見られないことから、この落ち込みはSJ-209より古い時期に形成されたものと推定される。土壤など遺構かとも考えられるが、出土遺物もなく詳細は不明である。

喪棺は、覆口式と考えられる複式棺で、上蓋は「く」の字形口縁でイチジク形を呈す小型窓。下蓋は口縁が逆「L」字形を呈す截頭卵形の大型窓で胴部中位に断面三角形の突帯が1条めぐる。上蓋と下蓋の法量は、上蓋は口径32cm、器高は33cm、下蓋は口径29cm、器高46cmである。主軸はN-65°-W、傾斜角度は45°を測る。

SJ-210 (Fig. 9 · PL. 3)

SJ-210は、52mp付近の調査区の南側の法肩部分から検出された小児用喪棺墓である。法面の崩壊によって、南側の窓が原位置を失っている。また後世の削平によって原位置をとどめている北側の窓も上半部を失っている。墓構は、プラン、規模とともに不明。喪棺は、複式棺と推定されるが形式は不明。北窓（上窓と推定される。）は逆「L」字形口縁で砲弾形を呈す小型窓で口縁下部に断面三角形の突帯が2条めぐる。南窓は口縁が「T」の字形を呈す截頭卵形の大型窓で、突帯などは不明である。北窓と南窓の法量は、北窓は口径35cm、器高は55cm、下窓は口径45cm、器高は遺存部で10cmである。主軸は、北窓を基準とするとN-24°-E、傾斜は、北窓はほぼ水平に埋置されている。

SJ-211 (Fig. 9 · PL. 4)

SJ-211は、今回の調査で最東端、調査区55mp付近の法肩部分で検出された成人用喪棺墓である。後世の削平により、上下ともに窓の一部を失っている。墓構は、一部が調査区北側へ延びており、確認長で長軸1.1m以上、短軸0.70m、深さ0.95mの方形を呈す。喪棺は、挿入式と考えられる複式棺で、上窓は「く」の字形口縁でイチジク形を呈し、口縁下部に断面三角形の突帯が1条めぐる大型窓。下窓は口縁が「く」の字形を呈す胴に張りがある截頭卵形に近い大型窓で口縁下部に断面三角形の突帯が1条、胴部中位に断面「コ」の字形の突帯が2条めぐる。上窓と下窓の法量は、上窓は口径43cm、器高は遺存部で54cm、下窓は口径53cm、器高85cmである。主軸はN-33°-W、傾斜角

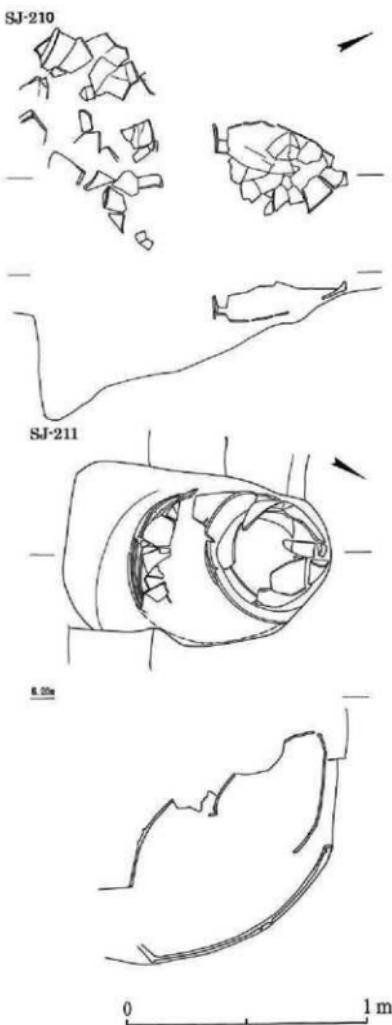


Fig. 9 喪棺墓実測図 (6) SJ-210 · SJ-211 (1/20)

度は44°を測る。

(2) 土壙 (Fig. 3、10・PL. 4・Tab. 2)

今回の調査では、土壙として調査した遺構は8基であった。土壙は、調査区の西部の5mpから15mpの間で多く見られたが、いずれもかなりの深さで後世の削平を受けたものと考えられ掘り方の基底部のみを残すものが多く、そのほとんどが覆土の状況から遺構と判断して調査を行った。また、まとまった遺物をもつものもほとんど無かったが、そのわずかな出土遺物から時期が推定できる土壙は、いずれも弥生時代中期の土器小片が出土したSK-215、SK-216、SK-217の3基であった。

また、これらの土壙として調査を行った遺構のなかでも、調査区の7mp付近から11mp付近にかけて溝状に検出されたSK-214及びSK-215は竪穴式住居址の一連の掘り方の基底部、同じく調査区14mp付近、43mp付近で検出されたSK-216、SK-219は長方形のプランを有し土壙墓の可能性も否定できない。

以下、土壙の法量等を一覧表にまとめて報告したい。

Tab. 2 坊所二本松遺跡2区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位:m・m)				柱穴状のビットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-213	不整形四角形	0.97 0.85	0.55 0.42	0.05	0.3			
SK-214	不整形	3.20 3.00	0.64 0.54	0.06	1.2			住居址の掘り方?
SK-215	不整形	1.52 1.28	0.78 0.55	0.26	0.5		弥生式土器片	住居址の掘り方?
SK-216	長方形	0.78 0.70	0.43 0.32	0.07	0.2		弥生式土器片	
SK-217	不整形四角形	(1.3) (0.8)	1.00 0.60	0.15	(0.4)		弥生式土器片	
SK-218	不整形	2.00 ※0.1	(1.3) ※0.2	0.26	※0.5			
SK-219	不整形	2.00 1.40	1.06 0.86	0.33	0.9			土壙墓の可能性あり
SK-220	不整形?	1.70 1.04	1.40 0.84	0.14	0.7			

(3) 井戸跡 (Fig. 3、10・PL. 4)

今回の調査で検出された井戸跡と考えられる遺構は、調査区5mp付近で検出されたSE-212の1基だけであった。

長径推定1.5m短径1.20mの南北方向にやや長い楕円形のプランをもち、内部がやや袋状に広がる竪穴遺構で深さ1m以上掘り下げたが、基底部まで達しなかった。このSE-212からは、中世土器の土鍋、擂鉢、羽釜などが比較的良好な状態でまとまって出土している。

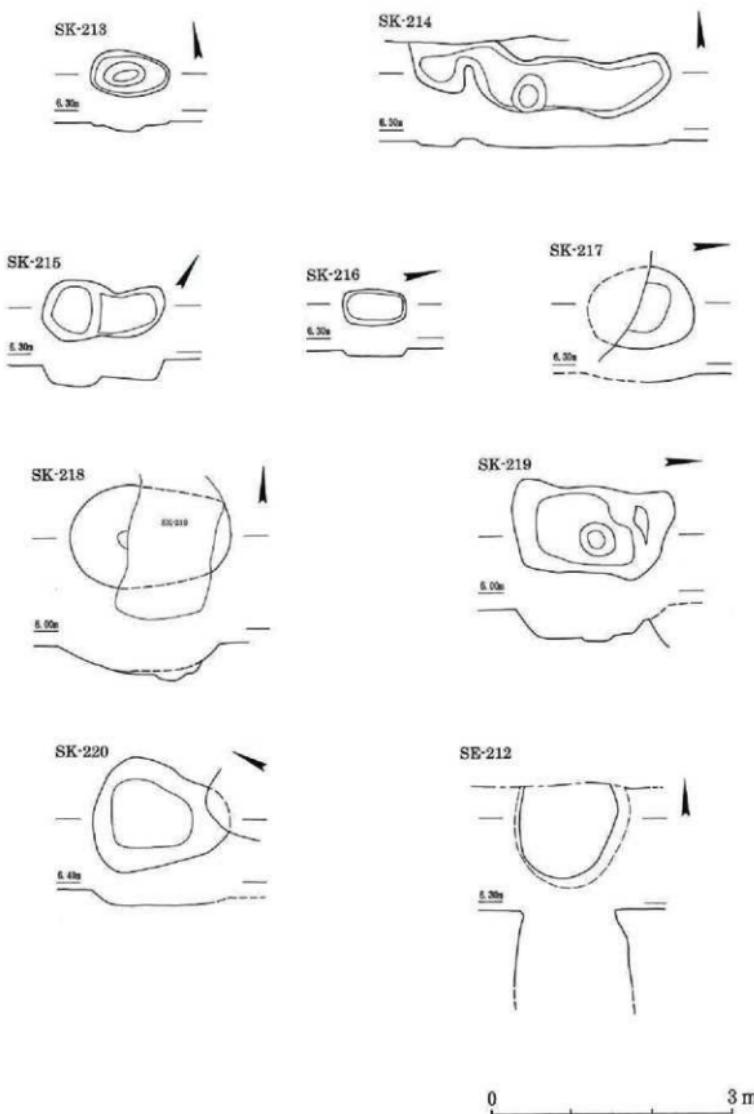


Fig.10 土壟・井戸跡実測図 SK-213～SK-220・SE-212 (1/60)

4. 遺物 (Fig.11~13・PL. 4~6)

今回の調査で出土した遺物は、甕棺墓の甕棺として用いられた弥生式土器がほとんどで、土壌などの遺構から出土した遺物は、前述のようにきわめて少量であった。ここでは、出土した遺物のうち甕棺として用いられた土器類および中世井戸跡から出土した土器類について報告したい。

(1) 甕 棺 (Fig.11)

ここでは、甕棺墓の埋葬主体として用いられた土器について、出土した甕棺墓11基のうち、口縁部が遺存する18個体の甕棺について図示し、形態、法量などは一覧表にまとめ、概要の報告としたい。

Tab. 3 坊所二本松遺跡2区 出土甕棺一覧表

甕棺番号	上窓 下窓	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	器体の形態	口縁部の断面形態	突帯など
SJ-201	上	小型甕	24	■28	イチジク形	「く」の字形口縁	
SJ-201	下	小型甕	25	30	イチジク形	「く」の字形口縁	
SJ-202	上?	小型甕	24	■27	砲弾形	逆「L」字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯1条
SJ-203	下	大型甕	60	91	截頭卵形	逆「L」字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯1条 腹部下位に断面「コ」の字形の突帯2条
SJ-204	上	小型甕	33	■17	イチジク形	「く」の字形口縁	
SJ-204	下	大型甕	40	68	截頭卵形	「く」の字形口縁	腹部中位に断面「コ」の字形の突帯1条
SJ-205	上	小型甕	32	41	砲弾形	逆「L」字形口縁	
SJ-205	下	小型甕	28	37	砲弾形	逆「L」字形口縁	
SJ-206	上	大型甕	49	81	截頭卵形	「T」字形口縁	腹部中位に断面三角形の突帯1条
SJ-206	下	大型甕	40	72	截頭卵形	「T」字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯1条 腹部中位に断面三角形の突帯1条
SJ-208	上	小型甕	28	31	イチジク形	「く」の字形口縁	
SJ-208	下	大型甕	26	41	截頭卵形	「く」の字形口縁	腹部中位に断面「コ」の字形?突帯2条
SJ-209	上	小型甕	32	33	イチジク形	「く」の字形口縁	
SJ-209	下	大型甕	29	46	截頭卵形	逆「L」字形口縁	腹部中位に断面三角形の突帯1条
SJ-210	北	小型甕	35	55	砲弾形	逆「L」字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯2条
SJ-210	南	大型甕	45	■10	截頭卵形	「T」字形口縁	不明
SJ-211	上	中型甕	43	54	イチジク形	「く」の字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯1条
SJ-211	下	大型甕	53	85	截頭卵形	「く」の字形口縁	口縁下部に断面三角形の突帯1条 腹部中位に断面「コ」の字形の突帯2条

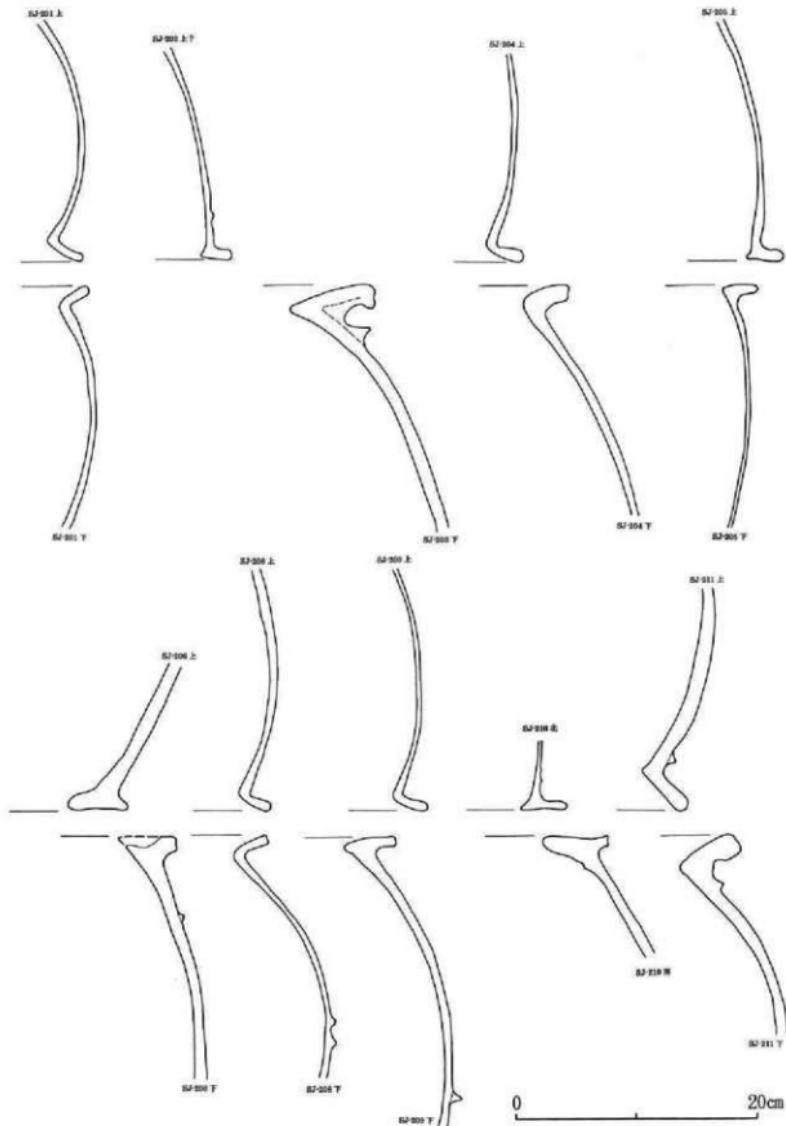


Fig.11 瓢棺口縁部実測図 SJ-201~SJ-206・SJ-208~SJ-211 (1/4)

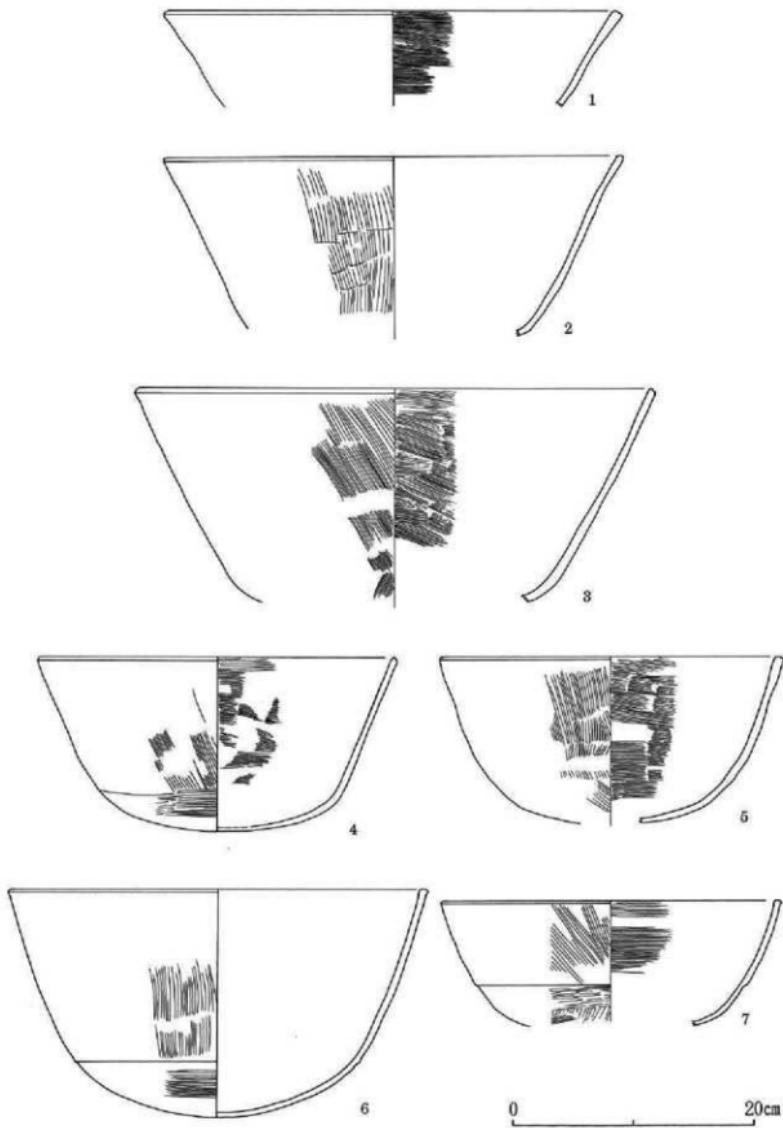


Fig.12 出土遺物実測図 (1) SE-212 (1/4)

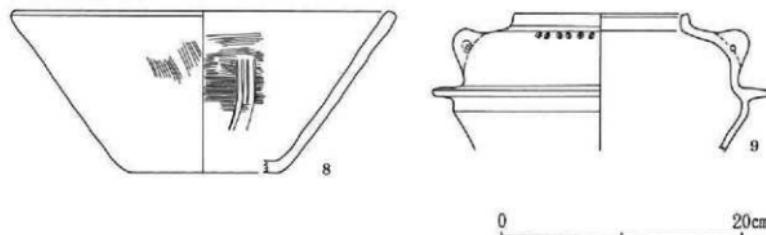


Fig. 13 出土遺物実測図 (2) SE-212 (1/4)

(2) 井戸跡出土遺物 (Fig. 12, 13・PL. 4 ~ 6)

1 ~ 9 は、いずれも中世の井戸跡と考えられる遺構SE-212から出土した。

1 ~ 7 は、瓦質の土鍋。いずれも浅い丸底の底部をもち、体部は外傾しながら開き口縁に至る。口縁は素口縁で、折り返し口縁や外面に粘土帯を貼った玉縁状の口縁をもつものは見られない。また、器壁や胎土の色調は、外面は暗灰色ないし灰褐色を呈し、赤褐色、黄褐色を呈すものは見られない。1、2は外傾する体部が口縁付近でやや外反するもの、3、4は外傾する体部が直線的に開き口縁に至るもの、5 ~ 7は体部がやや内湾しながら開き口縁に至るものなどが見られる。いずれも外面にスヌなどが付着している。1は、比較的体部が浅く、内面は横位の細かなハケ目、外面は口縁部に横位のハケ目、体部は粗いナデ。2は、内面ナデ、外面は縦位の粗いハケ目。3は、内面は口縁部に横位の、体部に斜位のハケ目、外面斜位のハケ目。4は、内面は口縁部、体部に横位のハケ目、外面斜位のハケ目。5は、内面は口縁部、体部に横位のハケ目、外面縦位のハケ目。6は、体部と底部の境界に明瞭な棱をもち、内面ナデ、外面縦のハケ目。7は、体部と底部の境界に明瞭な棱をもち、内面は口縁部、体部に横位のハケ目、外面斜位のハケ目。

8は、瓦質の擂鉢。平底で体部は外傾し直線的に開き口縁に至る。内面は横位の、外面は斜位のハケ目。遺存部内面に4条1単位の擂り目を3単位残す。

9は、素焼きの羽釜。明黄褐色を呈す。広口の短い口縁が直立し、胸部上半部は、丸く張りをもつ。胸部中位に幅3cmほどの鋸がめぐり、鋸の下部で屈曲し底部へ至る。肩部には把手を付けたと思われる一对の耳を持ち、細かな扇型の陰花文が連続押圧されている。内外面ともにナデ。

IV. まとめ

今回の坊所二本松遺跡2区の発掘調査は、調査区の延長が約60m、幅員は広いところでも約5m、調査面積200m²という線的な調査であった。しかも丘陵の縁辺の法肩部分という制約もあったが、弥生時代中期の甕棺墓11基、中世の井戸跡1基、その他土壙8基を調査することができた。

坊所地区の丘陵に広がる遺跡については、近年の再開発に伴い確認調査を含めてではあるが、徐々に調査例が増加しつつある。しかし、中世以来集落として発達してきたこの一帯では、広い範囲を対象とした発掘調査例は無く、今回の調査もそうであるが、いまだに部分的な調査にとどまっている。今回の調査対象地区あるいは坊所二本松遺跡のこの地域における位置づけ、全体像については、今後の調査例を待って検討することとしたい。

ここでは、今回検出された甕棺墓などについて調査所見を簡単に述べ、まとめとしたい。

甕棺墓の多様性について

先年の坊所二本松遺跡1区の調査¹⁾では、核となる主要な成人用甕棺墓を中心に数基の甕棺墓が隣接して営まれ一つの群をなして埋葬される傾向が看取されたが、今回の調査区域内においてはそのような規則性は認められない。また、今回検出された11基の甕棺墓は、甕棺に使用されている器種の形態や組み合わせが個体ごとに異なっている。本項でも触れたが、このような多様性は、今回の調査区域が丘陵の縁辺部分=墓域の縁辺部分にあることが大きな要因であると考えられる。

甕棺墓の時期について

今回検出された甕棺墓の時期についてみると、それぞれ、SJ-202・SJ-205・SJ-206・SJ-207・SJ-210の5基が中期前半と考えられ汲田式に相当し、SJ-201・SJ-204・SJ-208・SJ-209の4基が中期中葉と考えられ須歎式に相当し、SJ-203・SJ-211の2基が中期後半と考えられ立岩式に相当するものといえよう。

以上、簡単に所見を述べたが、前述したように坊所丘陵上の遺跡の調査は未だに部分的なものである。加えて、今回の調査区域は墓域の縁辺部分にあたり特異なケースの可能性も否定できない。ここでは、この地域の弥生時代の遺構、遺物について普遍的な事象について言及することは控えさせていただき、遺跡の全体像の解明について今は今後の調査に期待したい。

註

1) 原田 大介『坊所二本松遺跡』上峰町文化財調査報告書第15集 上峰町教育委員会 1998

図 版



坊所二本松遺跡 2 区 調査区遠景 一南西沖積地より一



調査区近景 0 mp~20mp付近 一西より一



調査区近景 35mp付近より東部分 (調査終了時) 一西より一



1



5



2



6



3



7



4



8

1 SJ-201 一南より一

2 SJ-202 一西より一

3 SJ-203 一南より一

4 SJ-204 一南より一

5 SJ-205・SJ-206・SJ-207 (前左から)

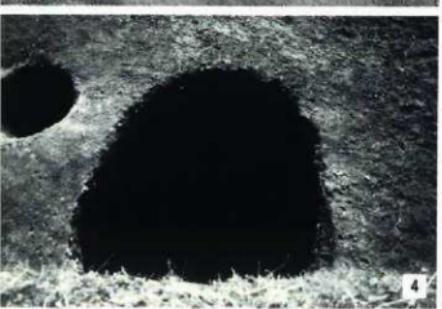
SJ-208・SJ-209 (奥左から) 一東より一

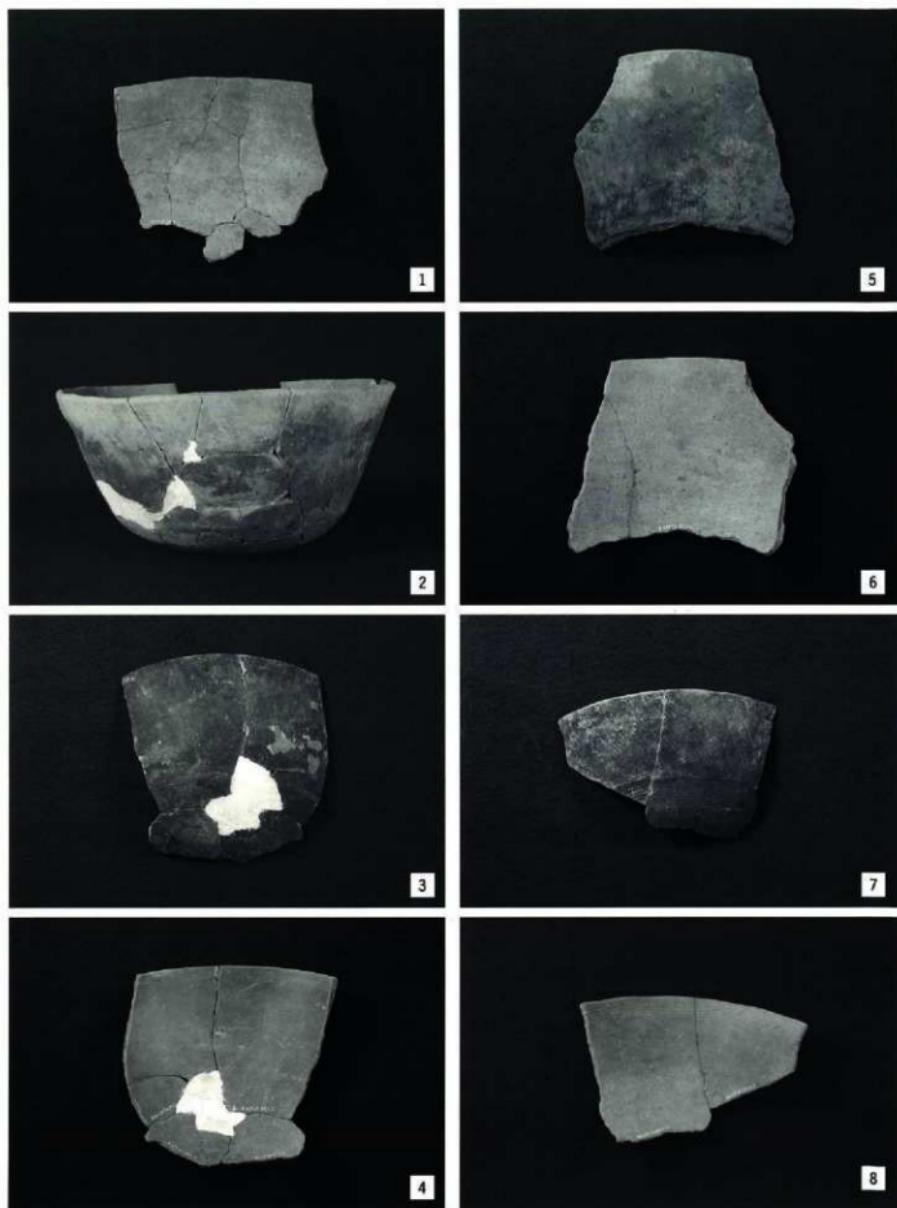
6 SJ-205 (前)・SJ-206・SJ-207 (奥右から)

一南より一

7 SJ-208・SJ-209 (左から) 一東より一

8 SJ-210 一南より一





1 3 SE-212出土
2 4 SE-212出土
3 5 SE-212出土
4 5 SE-212出土

5 6 SE-212出土
6 6 SE-212出土
7 7 SE-212出土
8 7 SE-212出土



1



2



3

1 8 SE-212出土

2 8 SE-212出土

3 9 SE-212出土

報告書抄録

ふりがな	ほうじょにはんまついせきII						
書名	坊所二本松遺跡II						
副書名	平成15年度佐賀県営土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第27集						
編著者名	原田 大介						
編集機関	上峰町教育委員会						
所在地	〒849-0123 佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4 上峰町民センター内 Tel 0952-52-3833/Fax 0952-52-3888						
発行年月日	2005年3月18日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村: 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
坊所二本松遺跡	佐賀県三養基郡 上峰町 大字 坊所 字二本松	41345 2012 3032	33°18'44"	130°25'33"	2004. 1.15 ↓ 2004. 2.20	200m ²	県営土地 改良総合 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坊所二本松遺跡	墳墓跡	弥生時代 中世	甕棺墓 土壙 井戸跡	11基 8基 1基	弥生式土器（中期） 中世土器		

上峰町文化財調査報告書第27集

坊所二本松遺跡II

平成17年3月10日 印刷

平成17年3月18日 発行

編集発行 上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4
0952-52-3833

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
0952-71-8520㈹

